

ディオールやグッチが…新作・限定品に採用

着物や帯として親しまれてきた京都の西陣織が、海外の高級ファッションブランドから注目を集めている。服やバッグのほか、ホテルなどの内装やインテリアの素材として使われ、可能性を広げている。

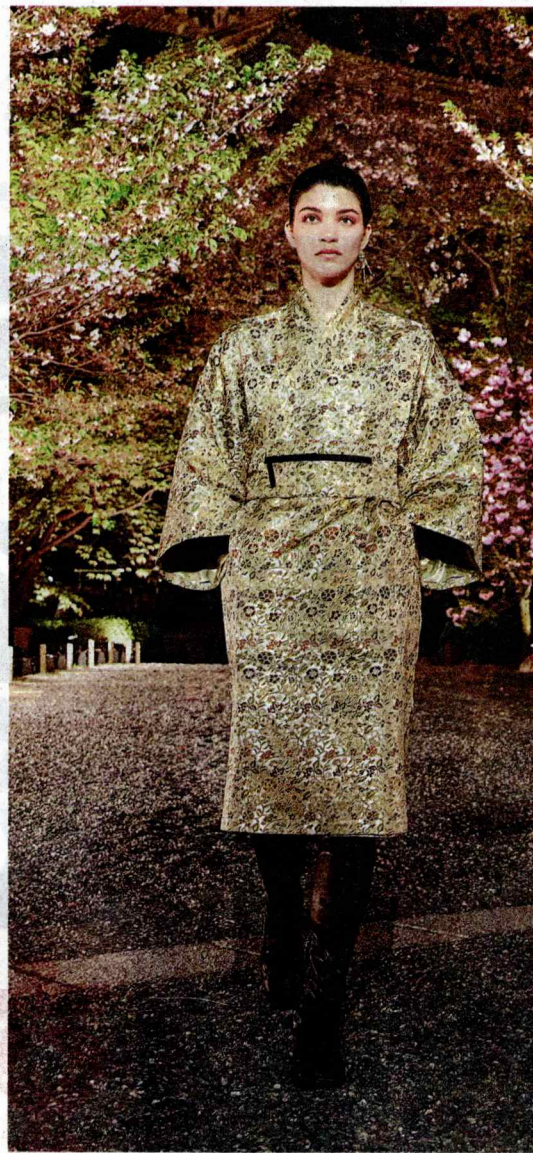
色鮮やかで、緻密な花柄のドレス、光沢感のある柄が浮き出たようなコート。

4月に京都で行われたフランスのブランド「ディオール」のショーで披露された新作には、1894年創業の西陣織の老舗、「龍村美術織物」の生地が使われた。

ディオールとの付き合いは古く、創業者のクリスチャン・ディオールが1954〜55年秋冬オートクチュール(高級注文服)コレクションで同社の生地を採用した。今回、そのうち2種類を、現代の解釈を取り入れて再現。約3年かけ、色調や光沢感を抑えるなどして仕上げた。

社長の龍村育さん(52)は「一流のデザイナーの視点や技術を通して、服になるのは感慨深い。日本のデザインを新鮮な目で見えて評価してくれた」と語る。

イタリアの「グッチ」は、1688年創業の西陣織の老舗「ホソオ」と協業したバッグを、3年前から限定販売する。



(生活部 梶彩夏)

西陣織 海外から熱視線

ホソオの織機は当初、着物の帯を作るためのもので、生地のは幅は約32センチ。大きい製品には使えなかったが、2010年に世界の標準である150センチ幅の織機を開発。世界的な建築家ピーター・マリノさんと協業して世界各国のディオールの店舗の内装を手がけたことを機に評判が広がり、事業を拡大した。高級ブランドの店舗や外資系ホテルの壁紙、ソファなどに使われ、注目を集めている。

社長の細尾真孝さん(47)は「持続可能性が重視される中、工芸の価値はどんどん高まっている。西陣織という織物を使って、世の中になかったものを生み出していきたい」と意気込む。

モト

UPDATE



ジル・サンダーの扇子

イタリアのブランド「ジル・サンダー」は、京都の四つの伝統工芸の工房と協業した限定コレクションを販売している。

創業200余年、仏壇に置かれる「おりん」を手がける「南條工房」と作った「おりんチャーム」(3万5200円〜)は、組みひもと組み合わせで作られている。1823年創業の京扇子の老舗「宮脇売扇庵」と組んだ布扇子(3万6300円〜)は、張り地にブランドの生地を使っている。

同ブランドは、京都の工房が代々受け継いできた匠の技や、環境や素材の恵みを最大限にいかす探究心あふれるものづくりの姿勢に共鳴したという。

伝統工芸との協業ほかに

コラボ広がる ホテル壁紙にも

西陣織の市場は、衰退傾向にある。西陣織工業組合(京都)によると、国内出荷額は最盛期(1990年)の約2790億円に対し、2023年は約170億円となり、組合員数も1160社から280社に減少している。西陣織は分業制で成り立っており、細尾さんは「海外ブランドとの協業は職人を守っていくことにもつながる」と力を込める。

服飾史家の中野香織さんは

「日本の工芸品が持つ、数百年の歴史や手間と時間をかけた希少性のある技術に世界が注目している」と分析する。「海外資本のブランドと対等な関係性を築いていくことが、今後、産地を守るために重要だ」と話している。

市場は衰退傾向

グッチとホソオが協業したバッグ
グッチ提供



色とりどりの糸を使って作業を進める職人(7月、京都市の龍村美術織物の工房で)

